

## 今日の説教のポイント<使徒言行録 25 章 1~12 節

### ①異教の為政者が立てたこの世の法制度をどう考えるか？

ここで興味深いのは、異邦人総督フェストゥスがこの世の法制度に則って誠実に行動したことでパウロの命が救われた点です。しかし、だからと言って、フェストゥスが人間として立派だと言いたいわけではありません。彼もまた、「ユダヤ人に気に入られようとして」、エルサレムで自分が裁く裁判をパウロに勧めているからです (9)。

にもかかわらず、パウロが「私は皇帝に上訴します」と言った後、フェストゥスはその線を進めますので、やはり彼は当時の法制度に誠実に取り組んだ人でした (11-12)。誠実でない為政者であったなら、彼の命は危うかったでしょう。パウロはフェストゥスがこの世の法を誠実に執行したことによって救われた、と言う所以です。

この出来事は、パウロが、「為政者たる者は、真の神を知る者であろうがなかろうが、正しいことを行い、悪しき者を罰する存在でなければならない」、と語っているローマの信徒への手紙 13 章と読み比べてみると興味深いものがあります。

### ②「私は皇帝に上訴します」とパウロに言わせたもの！

パウロがフェストゥスに、「私は皇帝に上訴します」(11)と返答した場面ですが、唐突な感じがしませんか？ 彼からエルサレムでの裁判を勧められて答えているうちに、急に頭に浮かんだという感じです。実はパウロはすでに主から、「ローマに行って、主を証しするように」と示されていました (23:11)。彼もそれを受け入れました。しかし、それがいつ、どういう仕方で実現されていくのかは知らなかったようです。世界の主都ローマでの伝道。それが今、思いもよらない、捕らわれの身で、裁判にかけられる被告としてローマへ行くという形で与えられ、それを受け入れて進み出すのです。そして、確かにローマに行き、2年間住んで伝道できました (28:30-31)。しかし、その後間もなく殉教の死を遂げたと言われています。私たちが歩み行く道とそのゴールも私たちの思いを超えたものであり、またそれでいいのです。主に誠実に聞き求め、それで示された道を行きさえすれば！